

の便宜上、露西亞に本部を置き、參加各國に支部を設け、諸國の探検隊に對しては露西亞政府から種々便宜を計ることゝなつた。尤もこれより以前一九〇〇年には、既に英のスタイン氏は印度政府の旨を受けてこの地方に入り、于闐附近の探検發掘に従事し、翌年多くの貴重なる蒐集品を携へて引上げたので益々諸國の學者をして此の計畫に熱心ならしめたものである。

かくて一九〇〇年——一九〇一年のスタイン氏の探検を先頭にして諸國の探検が此の地に行はれ、英國では一九〇六年——一九〇九年にスタイン氏の第二回、更に一九一四年——一九一六年に同氏の第三回の探検があり、獨逸では一九〇二年——一九〇三年にグリュンウエーデル氏の第一回、一九〇五年——一九〇七年に同氏の第二回、一九〇四年——一九〇七年にはル・コック氏の第一回、一九一三年——一九一四年には同氏の第二回、佛蘭西では一九〇六年——一九〇九年にペリオ氏といふやうに、殆んど競争の姿を呈し、此の間露西亞からもオルデンブルグ氏をはじめ、其他の人々の探検があり、またウルムチ駐在の同國領事官の手に依つて、始終遺物の蒐集を怠らなかつた。吾が國からは公けの事業としては行はれなかつたが、大谷光瑞氏が堀、渡邊氏等と共に明治三十五年（一九〇二年）此の地方に入り、ついで明治四十一年——四十二年には橘、野村の二氏、明治四十三年——大正三年には橘氏及び吉川氏の探検が行はれた。

かく諸國の探検家が、十數年の間踵を接して此の地方に入り込んだ有様は、實に近時學術界の偉觀である。此等の人々は一樣に天山の麓の地方、即ち北道に當つて位するカシュガル、庫車、カラシャール、ツルファン附近をしらべ、それぞれ古の疏勒、龜茲、焉耆、高昌諸國の史跡を探つたが、スタイン氏と吾が國の諸氏とは更に南道諸國